

# やまなし

宮沢賢治

青空文庫



小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈げんとうです。

## 一、五月

二疋ひきの蟹かにの子供らが青じろい水の底で話していました。

『クラムボンはわらったよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

『クラムボンは跳ねはてわらったよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

上の方や横の方は、青くくらく鋼はがねのように見えます。そのなめらかな天てんじょう井ようを、つぶつぷ暗い泡あわが流れて行きます。

『クラムボンはわらっていたよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらったよ。』

『それならなぜクラムボンはわらったの。』

『知らない。』

つぶつぶ泡が流れて行きます。蟹の子供らもぽっぽっぽつぽつづけて五六粒泡を吐きま  
した。それはゆれながら水銀のように光って斜めに上の方へのぼって行きました。

つうと銀のいろの腹をひるがえして、一足の魚が頭の上を過ぎて行きました。

『クラムボンは死んだよ。』

『クラムボンは殺されたよ。』

『クラムボンは死んでしまったよ……。』

『殺されたよ。』

『それならなぜ殺された。』兄さんの蟹は、その右側の四本の脚の中の二本を、弟の平べ  
つたい頭にのせながら云いました。

『わからない。』

魚がまたツウと戻って下流のほうへ行きました。

『クラムボンはわらったよ。』

『わらった。』

にわかにパツと明るくなり、日光の黄金は夢のように水の中に降って来ました。

波から来る光の網が、底の白い磐の上で美しくゆらゆらのびたりちぢんだりしました。泡や小さなごみからはまつすぐな影の棒が、斜めに水の中に並んで立ちました。

魚がこんどはそこら中の黄金の光をまるつきりくちやくちやにしておまけに自分は鉄いろに変に底びかりして、又上流の方へのぼりました。

『お魚はなぜああ行ったり来たりするの。』

弟の蟹がまぶしそうに眼を動かしながらたずねました。

『何か悪いことをしてるんだよとってるんだよ。』

『とってるの。』

『うん。』

そのお魚がまた上流から戻って来ました。今度はゆっくり落ちついて、ひれも尾も動かさずただ水にだけ流されながらお口を環のように円くしてやって来ました。その影は黒くしずかに底の光の網の上をすべりました。

『お魚は……。』

その時です。俄に天井に白い泡がたつて、青びかりのまるできらきらする鉄砲弾のようなものが、いきなり飛込んで来ました。

兄さんの蟹はつきりとその青いもののさきがコンパスのように黒く尖<sup>とが</sup>っているのも見ました。と思ううちに、魚の白い腹がぎらつと光って一ぺんひるがえり、上の方へのぼったようでしたが、それつきりもう青いものも魚のかたちも見えず光の黄金<sup>きん</sup>の網はゆらゆらゆれ、泡はつぶつぶ流れました。

二疋はまるで声も出ず居すくまつてしまいました。

お父さんの蟹が出て来ました。

『どうしたい。ぶるぶるふるえているじゃないか。』

『お父さん、いまおかしなものが来たよ。』

『どんなもんだ。』

『青くてね、光るんだよ。はじがこんなに黒く尖<sup>とが</sup>ってるの。それが来たらお魚が上へのぼって行ったよ。』

『そいつの眼が赤かったかい。』

『わからない。』

『ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみと云うんだ。大丈夫<sup>だいじょうぶ</sup>だ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから。』

『お父さん、お魚はどこへ行ったの。』

『魚かい。魚はこわい所へ行つた』

『こわいよ、お父さん。』

『いいいい、大丈夫だ。心配するな。そら、樺かばの花が流れて来た。ごらん、きれいだろう。』

泡と一いっしょ緒よに、白い樺の花びらが天井をたくさんすべつて来ました。

『こわいよ、お父さん。』弟の蟹も云いました。

光の網はゆらゆら、のびたりちぢんだり、花びらの影はしずかに砂をすべりました。

## 二、十二月

蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変りました。白いやわら柔かなまるいし円石もころがって来、小さなきり錐の形の水すいしやう晶の粒や、金雲母きんうんものかけらもながれて来てとまりました。

そのつめたい水の底まで、ラムネの瓶びんの月光がいつぱいに透すきとおり天井では波が青じろい火を、燃したり消したりしているよう、あたりはしんとして、ただいかにも遠くからというように、その波の音がひびいて来るだけです。

蟹の子供らは、あんまり月が明るく水がきれいなので睡ねむらないで外に出て、しばらくだまって泡をはいて天上の方を見ていました。

『やっぱり僕ぼくの泡は大きいね。』

『兄さん、わざと大きく吐いてるんだい。僕だつてわざとならもつと大きく吐けるよ。』

『吐いてごらん。おや、たつたそれきりだろう。いいかい、兄さんが吐くから見ておいで。そら、ね、大きいだろう。』

『大きないや、おんなじだい。』

『近くだから自分のが大きく見えるんだよ。そんなら一緒に吐いてみよう。いいかい、そら。』

『やっぱり僕の方大きいよ。』

『本当かい。じゃ、も一つはくよ。』

『だめだい、そんなにのびあがつては。』



またお父さんの蟹が出て来ました。

『もうねろねろ。遅いぞ、あしたイサドへ連れて行かんぞ。』

『お父さん、僕たちの泡どつち大きいの』

『それは兄さんの方だろう』

『そうじゃないよ、僕の方大きいんだよ』弟の蟹は泣きそうになりました。

そのとき、トブン。

黒い円い大きなものが、天井から落ちてずうつとしずんで又上へのぼって行きました。

キラキラツと黄金きんのぶちがひかりました。

『かわせみだ』子供らの蟹は頸くびをすくめて云いました。

お父さんの蟹は、遠めがねのような両方の眼をあらん限り延ばして、よくよく見てから云いました。

『そうじゃない、あれはやまなしだ、流れて行くぞ、ついて行って見よう、ああいい匂においだな』

なるほど、そこらの月あかりの水の中は、やまなしのいい匂いでいっぱいでした。

三足はぼかぼか流れて行くやまなしのあとを追いました。

その横あるきと、底の黒い三つの影法師が、合せて六つ踊るようにして、やまなしの円い影を追いました。

間もなく水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青い焰をあげ、やまなしは横になって木の枝にひっかかるとまり、その上には月光の虹がもかもか集まりました。

『どうだ、やつぱりやまなしだよ、よく熟している、いい匂いだらう。』

『おいしそうだね、お父さん』

『待て待て、もう二日ばかり待つとね、こいつは下へ沈んで来る、それからひとりでおいしいお酒ができるから、さあ、もう帰って寝よう、おいで』

親子の蟹は三足自分等の穴に帰って行きます。

波はいよいよ青じろい焰をゆらゆらとあげました、それは又金剛石の粉をはいているようでした。

\*

私の幻燈はこれでおしまいです。





# 青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

初出：「岩手毎日新聞」岩手毎日新聞社

1923年（大正12年）4月8日

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年4月15日作成

2013年7月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# やまなし

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>